第２２４回　「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

句会も８月は夏休みでした。そして、予定していた９月８日（金）の句会は、台風１３号の余波を受け、これまた９月１０日（日）に延期して開催しました（奥田和感さん、会場の設定変更にご尽力下さって有難うございました）。８月５日の「昼涼み会」に参加された方々とは一か月ぶり、参加されなかった方とは、二か月ぶりということになり、何だか、とても懐かしい気持がしました。

この夏休み中に目を通した俳句本で、「俳句は名詞中心の文学です」とあるのを見つけました。「季語という四季の情感を呼び覚ます連想力のある言葉を使って、読者とイメージを共感することを、基本的戦略に据えた詩」と言い、まさに至言だと思いました。そして「その季語は、歳時記を手に取ってみればわかることですが、圧倒的に名詞が多いのです」と。ここから考えれば、なる程「俳句は名詞中心の文学」という言葉に首肯せざるを得ないなと思いました。（井上泰至、堀池克洋 共著『俳句がよくわかる文法講座』からの抜粋）

私たちの「道草」活動を顧みますと、歳時記を吟味し季語を選択して、その季語を活かし３句を詠みます。そして集められた句の中から、優秀と思う句を５句選んで、更にその５句の中から最優秀と思われる１句を天賞として選句、皆さんに鑑賞していただく訳ですが、句を詠む愉しみ、選句する楽しみ、しかも皆さんの前で、自分がその句から何を感じて選んだかなどの感想を発表させていただく中で、俳句の中にどっぷりと浸りこんでいく過程を、しみじみと味わっているということでしょう。
季語と言えばもう一つ「季語の本意」という言葉があり、これをしっかり頭に入れて作句しなければならないのですが、このお話はまた次の機会にしましょう。

今月は秋の句を三句詠んで、森田多佳さんにお送りしました。多佳さんには「投句の一覧表」作成から「まとめ」まで、すっかりお世話になりました。有難うございます。投句参加者と対面句会に参加したのは下述の方々であり、詠まれた句から優秀句に選ばれたのは下述のとおりです。

○　投句参加者（１７名）
芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、
辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、舩戸清助さん、本間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然。

○　対面句会参加者（９名）
明峰さん、柴楽さん、創風さん、傘吉さん、多佳さん、
月草さん、和感さん、晶如さん、白然。

天賞句並びに優秀句

◎『桐一葉ふはりと老いの着地かな』	明峰	天２☾４
◎『いつまでも手を振る母よ白木槿』	荻女	天２☾４
◎『朝露や光りて今日の草の糧』	白然	天２☾４
◎『行くバスを案山子見送る田舎道』	傘吉	天２☾３
◎『処暑の風過る木陰の立ち話』	傘吉	天１☆10
◎『隧道を出で秋草の廃ホテル』	栄女	天１☆６
◎『波のよに坂下りくる風の盆』	一光	天１☆５
◎『縁側に座布団二枚月の秋』	多佳	天１☾４

◎『秋の蝶よろけて路地を折り返す』　まさあき　　天１☾３
◎『また一錠薬のふえる九月かな』　まさあき　　天１☾２
◎『ロープウェイとんと降り立つ大花野』　荻女　　天１☾２
◎『稲妻に吾子を抱き締め大丈夫』　錦流　　天１☾２
◎『秋灯や今宵のり子の詩集開く』　白然　　天１☾２
◎『山稜を浮き彫りにして空澄める』　傘吉　　☆５
◎『家事の間のコーヒー一杯菊白し』　清助　　☾４

今月の最多天賞獲得は、明峰さんの句「桐一葉ふはりと老いの着地かな」が、天賞二つを獲得しました。中国の名言や漢詩にも使われている「一葉散って天下の秋を知る」という故事です。この一葉が落ちる様(さま)と、自らの「老い」の着地を予想する表現が、寂寥感の中にも温かさを感じさせる魅力ある句になっています。

次に荻女さんの句「いつまでも手を振る母よ白木槿」も天賞二つを獲得しました。お決まりの「母もの」の一句と言ってしまえばそれまでですが、母の偉大さは不変です。季語の「白木槿」と手を振り続ける母を、見事に活かした句になりました。次に白然の句「朝露や光りて今日の草の糧」も、天賞二つをいただきました。草花に露の光る早朝の情景です。季語は朝露。葉に溜まる露こそが、今日一日を生きる草花の糧になります。

天賞二つを獲得した句が、もう一句あります。傘吉さんの句「行くバスを案山子見送る田舎道」です。誰も見送る人のいない寂しい田舎のバス道であったかも知れません。よく見ると田圃には、顔は手書きの案山子が、見送っているではありませんか。その安心感というか、安堵感に、読者は共感されたのでしょう。

引き続いて傘吉さんの句「処暑の風過る木陰の立ち話」が、天賞一つと得票数が十票になる最多得票賞（☆印）を獲得しました。季語は「処暑」です。「処暑の風」には秋を思わせる爽快感もあるでしょう。その風を受ける木陰での立ち話です。多数の票が集まるのは当然でしょうか。次に栄女さんの句「隧道を出で秋草の廃ホテル」が、天賞一つと高得票賞（☆印）を獲得しました。第２位の高得票賞です。この句で表現された秋草は、下五に表現された「廃ホテル」から推察して、芒とか萱が、閉じられたホテルを覆い始めているのを想像します。しかもトンネルを出た瞬間に、出会った廃ホテルです。ドキッとして印象に残る一句になりました。

次に、一光さんの句「波のよに坂下り来る風の盆」が、天賞一つと第３位の高得票賞（☆印）を獲得しました。おはら風の盆をご覧になった方には、胸に刻み込まれるような強い印象を残すお祭りではないでしょうか。「波のように坂を下ってくる」という表現に、高得票となったのでしょう。次に天賞は付きませんでしたが、傘吉さんの句「山稜を浮き彫りにして空澄める」が、第３位の高得票賞（☆印）を獲得しました。山の尾根を浮き彫りにしたような空澄める秋の一日、現実には今年は、未だ体験できていない秋空の一日ですが、早くこんな一日に出会いたいものです。

次に、多佳さんの句「縁側に座布団二枚月の秋」が、天賞一つを獲得しました。縁側に座布団二枚という、まるでセッティングされた舞台のような夜に、下五に表現された「月の秋」という季語です。観る月の多いこの時期、毎夜準備された座布団に、どんな方が座られるのだろうと、想像をたくましくすると、楽しくなるではありませんか。次にまさあきさんの句が二句「秋の蝶よろけて路地を折り返す」と「また一錠薬のふえる九月かな」が、それぞれ天賞を獲得しました。前句は、秋の蝶のおぼつかなさに対して、中七の「よろけて路地を」の表現が読者の共感を得、下五の「折り返す」の滑稽さに親しみを感じたのではないでしょうか。後句は、上五、中七で「また一錠薬のふえる」で、読者のハートをつかみ、下五の「九月かな」で、わが身に立ち帰って「用心しよう」と。とても親しみを覚える句になっています。

次に、荻女さんの句「ロープウェイとんと降り立つ大花野」が、天賞一つを獲得しました。句意は「ロープウェイで降り立った頂上には、大きな花野が広がっていた」ということでしょうが、下五を「大花野」と、名詞止めにしたのが良かったのでは。次に錦流さんの句「稲妻に吾子を抱き締め大丈夫」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントには「万人の共感を得る情景」とありました。下五を「大丈夫」と、口語を使われたのも良かったかも知れません。白然の句「秋灯や今宵のり子の詩集開く」も、天賞一つをいただきました。読書の秋、茨木のり子の詩からは、凛とした姿勢がはね返ってきます。多佳さんが句会でご指摘下さった上五を「秋ともし」と。勘案の結果、以降は「秋ともし」と推敲させていただきます。

最終になりますが、清助さんの句「家事の間のコーヒー一杯菊白し」は、天賞も高得票賞もついていませんが、佳句として掲載させていただきました。季語の「菊白し」に対して、家事の間の一杯のコーヒーですが、「菊の白さ」の爽やかな感じが、居間に広がった気がしました。作者の Enjoy life のお気持ちが、伝わって参りました。因みに「白菊」の花言葉は「真実」と伺いました。

なお、掲載の順番ですが、傘吉さんの最多得票賞（☆印）第３位の句「山稜を浮き彫りにして空澄める」は、掲載の順番とは別に、最多得票賞の一光さんの風の盆の句の次に書かせていただきました。

今回、句会記録を書いていまして、最多得票賞（☆印）は、従来通りとしまして、高得票賞の第２位と第３位の書き方に迷いました。何か適切な書き方はないでしょうか。それと今回、推敲については、筆者の句で「秋ともし」を、推敲のことを書かせていただきました。俳句には推敲がつきもの、何か推敲コーナーのようなものを付記することは可能でしょうか。あるいは、必要ないでしょうか。

（白然記）